

Title	観光資源化する野生生物の可能性
Author(s)	敷田, 麻実
Citation	Wildlife Forum, 21(2): 28-31
Issue Date	2017-02-15
Type	Article
Text version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10119/16929">http://hdl.handle.net/10119/16929</a>
Rights	Copyright (C) 2017 「野生生物と社会」学会. 敷田麻実, Wildlife Forum, 21(2), 2017, pp.28-31.
Description	

# 観光資源化する野生生物の可能性

敷田麻実

北陸先端科学技術大学院大学

## 観光資源としての野生生物

しごく当たり前のことだが、観光には観光資源を必要とする。魅力を持つ対象があつてはじめて、人は観光行動をとる。満足できる資源があれば、観光客が集まり、観光地という非日常空間で楽しみや満足を得ることが出来る。そのため、観光客も観光事業者も常に魅力ある観光資源を探し求めてきた。

こうした観光資源の中でも、野生生物は以前から優れた資源であつた。特に大型の野生生物は動きがあり、視覚に訴えることができる。そのため、特に大型の動物が観光にとって重要な資源であることをサービス提供側も認識してきた。特に近年では、野生生物の観光利用は、「ワイルドライフツーリズム」や「ワイルドライフウォッチング」として、観光分野でも注目されている。その例として、北海道観光でのヒグマや

沖縄観光におけるクジラをあげることも出来る。

また、観光資源の選択で、生態系などの自然資源だけにフォーカスしたのが、「エコツーリズム」である。1980年代以降に普及したエコツーリズムは、特定の観光対象を持つ観光、S-I-T (Special Interest Tourism) に分類することができ、野生生物が観光資源として使われることが多い。ホエールウォッチングツアーやバードウォッチングツアーになるとそれがより明確になり、野生生物を観光資源として利用する。そこで本稿では、野生生物の観光資源化が持つ意味やその課題、さらに可能性に言及したい。野生生物を観光などに「使う」ことを直感的に忌諱するむきもあるだろうが、地域関係者にとっては野生生物が地域資源であり、それを有効活用することはきわめて「当たり前」の選択である。

## 文化的サービスの源泉としての野生生物

世界自然遺産に認定された北海道の知床半島には、年間180万人の観光客が訪れる。しかし、知床世界自然遺産の観光では、自然そのものの魅力ではなく、特定の野生生物、ヒグマ・エゾシカ・キタキツネが観光資源化されている。観光客の90%が興味を示したのは景観で、世界自然遺産登録の理由となった生物多様性や生態系の豊かさではない。

もちろん、現在まだ主流の観光は、前述したS-I-Tではなく、ある地域や都市をターゲットにした観光である。また個人旅行でも、場所や空間が観光対象となり、そこに存在する複数の観光資源を利用することが一般的である。しかし、こうした観光であっても、場所や空間そのものを「利用」できないので、その代替品として「モノ」が使われることが多

い。野生生物もまさにそこに使われる。

一方、逆側、つまり資源側から考えると別のことが見える。現代はモノではなくサービスが中心の社会である。モノはサービスの提供に必要なので(仕方なく)提供や利用がされるという主張があり (Vargo and Lusch, 2004)、現実にもそうなっている。しかし、これは資源を提供する側にとってはまったく都合が悪い。資源の価値は、消費者に提供されるサービスの価値によって決定されるからだ。野生生物の例で言えば、生物多様性や生態系の一部としての野生生物の価値ではなく、野生生物が観光などでサービスとして利用された際の価値によって野生生物が評価される。

一方、生態系から生ずる便益は近年、生態系サービスとして位置づけられた。サービスとしたことで、利用に対する対価を認識させることができる。そして観光は、レクリエー



シヨンや教育など審美的、精神的な恩恵を提供する「文化的サービス」に分類されている。

#### 一方的な資源化の進行

野生生物を観光資源とし、文化的サービスを取り出していることを指摘しても、それは以前から起きていることで、まったく驚くにはあたらない。しかし、現在急速に進んでいるのは「過度な資源化」や「一方的な資源化」である。国立公園や保護地域の管理者の意図や主張に関係なく、野生生物が一方的に資源化される。

それにはサービスの提供を主とした観光産業が持つ特性が影響している。観光客による資源化は、野生生物自体を食べたり、毛皮を利用したりという消費的利用ではなく、非消費的利用であることが一般的である。つまり極端に言えば、見せるだけでも観光資源化できるので、資源利用コストの低さから容易に資源化される。さらに森重(2012)が指摘するように、観光客が自ら見たものを探し出し、面白がって観察対象にするなど、資源化自体を観光



写真1 観光資源化されるヒグマ

客が楽しむこともできるので、資源化は急速に進むことが多い。

たとえば知床半島のヒグマは、2000年代までは観光資源ではなく、むしろ回避すべき対象であった。1990年代の知床の旅行ガイドブックを見ても、ヒグマを積極的に紹介しているページはない。しかし現在は、知床といえばヒグマという連想ができるほど、ヒグマが観光資源化され、多くの商品に使われている(写真1)。

こうした過度な、また一方的な資源化によって野生生物が影響を受け、生態系の持続可能性が低下する懸念がある。保全関係者にとっては憂慮すべき状態であり、安易な観光資源化だと批判することもできる。



写真2 直接利用



写真3 イメージ利用

しかし、それで問題は解決しない。むしろ、観光資源化が経済的利益に繋がるために、資源化が更に進行することが多い。

そこで逆に、それを地域資源の多元的利用と捉えて、資源化プロセスや資源化の質向上を図ることができ。それは、ある野生生物を対象に多様なツアーやサービスを創出するのではなく、より高度な利用を楽しむようにコンテンツを充実させる。

あるいは敷田(2016)が提案するように、高度なコンテンツに変換することだと考えられる。

#### 背景としての資源利用

もちろん文化的サービスとして野生生物が評価されることは、評価されないことより「まし」である。ま

た、その評価の結果、野生生物の重要性に気づき、保全活動が進めば歓迎できる。しかし、サービスの提供というからには、どのような場面で、どのように提供されるかが問題である。そこで、野生生物が利用される

プロセスについて言及したい。なお、野生生物をハンティングする、食べる、また毛皮を利用するなどの供給サービスとしての消費的利用もあるが、ここでは「非消費的利用」だけ

を議論する。

まず、観光現場でよくあるのは、野生生物の観察や写真撮影としての「直接利用」である。このタイプの利用は、野生生物という資源そのものや資源から発生する文化的サービスを利用する。そのため実在の野生生物を必要とする。写真2に示すような、野生生物の観察や写真撮影はその典型である。

次に、野生生物のイメージを利用する「イメージ利用」がある。それは実在の野生生物の代わりに、野生生物の持つイメージを利用することである。例えば、写真3に示すように、剥製を用いて「怖いヒグマ」のイメージを演出する。この場合は、生きた野生生物を使用しないので、好きなきに好きな場所で野生生物からの文化的サービスが利用できる。つまり、資源に左右されることなく、「安全に」ヒグマの怖さを堪能できる。また、実物を利用しないので、野生生物に悪影響を与えず、資源を効果的に利用できるという利点もある。

しかしイメージ利用がより進行すると、野生生物が単なる背景として使われる「背景利用」に発展する。この状態では、対象となる野生生物の固有性は失われ、何か別の目的の

ための背景（情報）として野生生物が使われる。写真4のように、飲食店の客寄せに使われるヒグマは、野生生物である必然性がなく、人目を引く目的が達成できればヒグマでなくとも何でもよい。

同様の例として、映画館でディナーを食べながら映画を見るという娯楽がある。本来は映画を見ることに主目的で、食事は脇役のはずが、食事と会話を楽しむために、カップルが映画を背景として利用する。映画関係者から見ると不謹慎な話だが、消費者にとってそれは問題ではない。

野生生物の観光資源化では、以上のような利用形態の違いがあることを意識して問題と対峙する必要があるだろう。直接利用は基本だが、野生生物への負担を減らすには、ある程度イメージ利用を促進した方がよい。しかしそれが背景利用となると、地域における固有の野生生物という意味は失われる。

### 観光資源化による 保全の促進とCSV

一方、観光資源化が野生生物の保

全に貢献できる例もある。

知床半島では希少種である海鳥「ケイマフリ」が2009年に95個体に減少した。そのため、個体数低下の要因と考えられた観光船によるケイマフリ営巣地近くの航行禁止を、保全側の関係者が提案した。しかし、観光船事業者の反対で、話し合いは紛糾しただけであった。ところが発想を変えて、観光客向けにケイマフリを説明するコンテンツを事業者に提供したところ、事態は大きく変化し、ケイマフリに配慮して航路を変更した。ケイマフリが「観光に使えること」の理解が保全につながった。

ここから得られる結論は、サービスを提供する源泉である資源が大切にされる可能性である。観光資源化は必ずしも「オーバーユース」や資源破壊につながるのではなく、十分コンテンツ化された文化的サービスであれば、関係者が価値を共有することができ、結果的に野生生物が保全できると考えられる。知床世界自然遺産のケイマフリの保全は、関係者による新たな価値創造であり、Porter and Kramer (2006) が指摘するCSV (Creating shared value) の好例である。

以上のように、観光産業や観光客

による資源化は、多くの国立公園や保護区で現在進行している状況である。従来は穏やかに進むことも多く、またそれは地域側にとって経済的利益に繋がる行為でもある。しかし、情報通信技術によって急速にモチーフ化やイメージ利用、背景利用が進む中では、今後野生生物の管理においても、のどかな時代の対応ではなく、コンテンツ化やイメージ化の管理を進めていかなければならない。

#### 参考文献

- 森重昌之 (2012) 「観光資源の分類の意義と資源化プロセスのマネジメントの重要性」、『阪南論集 人文・自然科学編』47(2), pp.113-124.
- Porter, M.E. and Kramer, M.R. (2011) 'Creating Shared Value', Harvard Business Review, Jan/Feb 2011, pp.62-77.
- 数田麻実 (2010) 「文化的サービスに注目した自然資本の活用」、『環境政策研究』9(2), pp.61-63.
- Vargo, Stephen L. and Lusch, Robert F. (2004) 'Evolving to a New Dominant Logic for Marketing', *Journal of Marketing*, 68(1), pp.1-17.

#### PROFILE



数田麻実 (しまだ あさみ)  
北陸先端科学技術大学院大学 教授  
石川県加賀市生まれ。高知大学農学部卒業後石川県水産課に15年間勤務。その間に養州エームスワック大学大学院に留学。帰国後金沢大学大学院環境科学研究科で博士号を取得。1998年に県を退職し、金沢工業大学教授、北海道大学観光学高等研究センター教授を経て2016年から現職。2006年から2011年まで野生生物保護学会会長。専門は地域マネジメント、地域人材育成、地域資源戦略 (エコトリスム等)。



写真4 背景利用